

リハビリテーション科

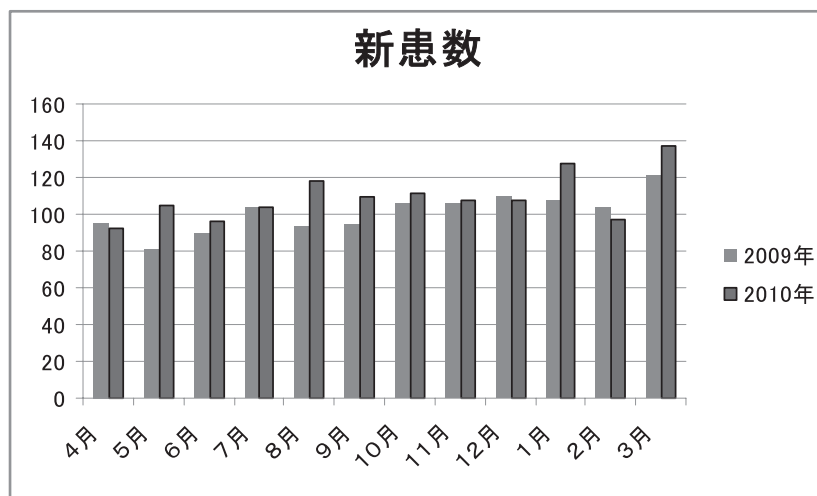
《概要・実績》

[理学療法]

1. 患者構成について

①新患数

2010年度における理学療法新患数は1,318名（男性717名、女性601名、平均年齢70.9歳）である。前年度（1,009名、男性497名、女性512名、平均年齢71.0歳）と比較すると、約209名の増加（20.7%増）となっている。男女比は10年度のほうが男性の割合がやや高くなっている。平均年齢には大きな変化はない。

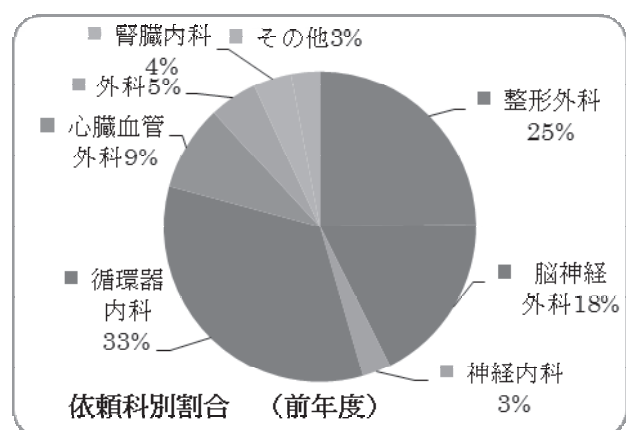
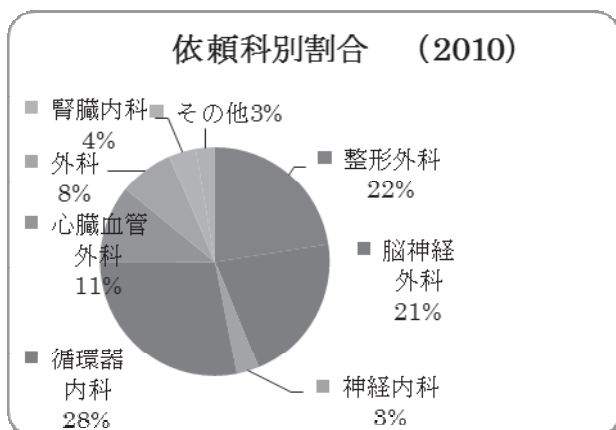


新患数	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
2009年	95	81	90	104	93	94	106	106	110	108	104	121
2010年	92	105	96	104	118	110	111	108	108	128	97	137

②依頼科別

整形22%、脳神経センターで24%。心臓センターで約38%となっている。

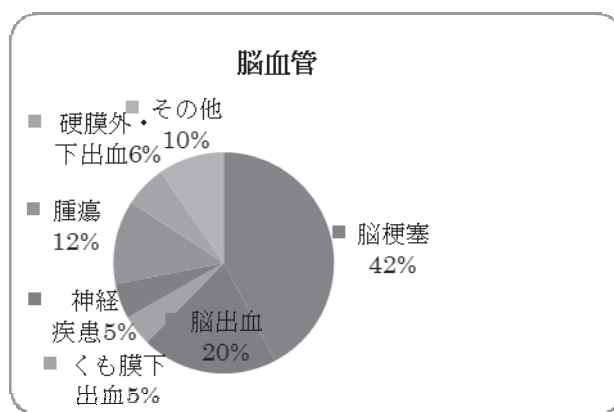
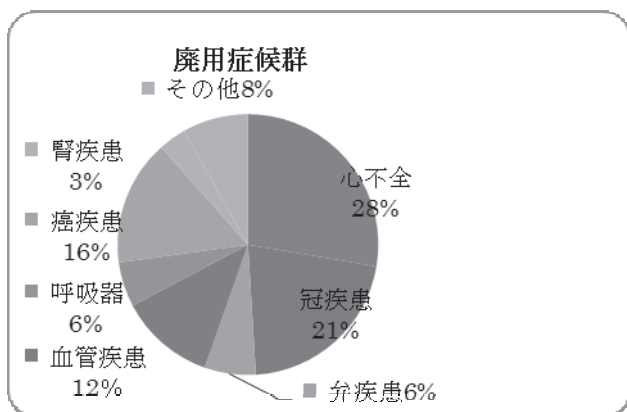
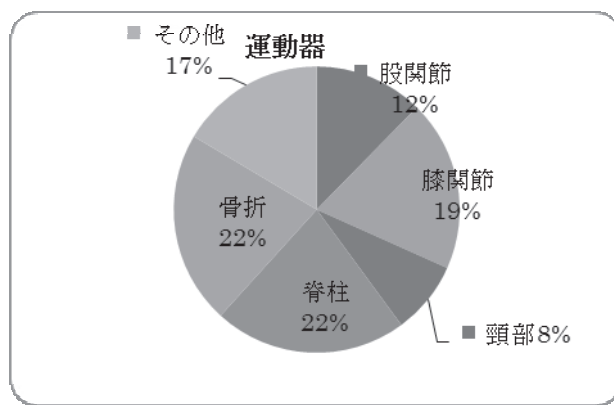
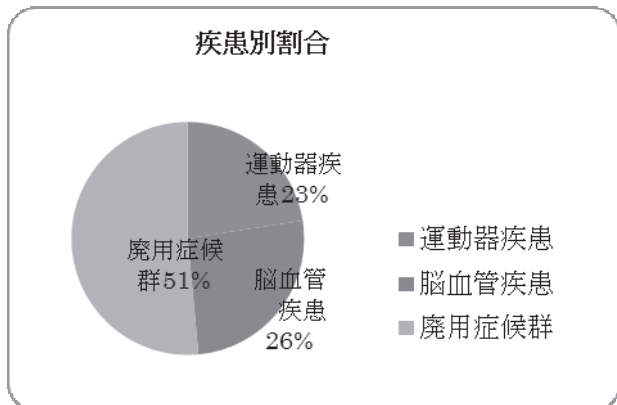
前年度との比較では、特に外科から5%⇒8%と約1.8倍近く依頼が増加傾向にある。



③疾患別

約半数が廃用症候群(疾患はグラフ参照)

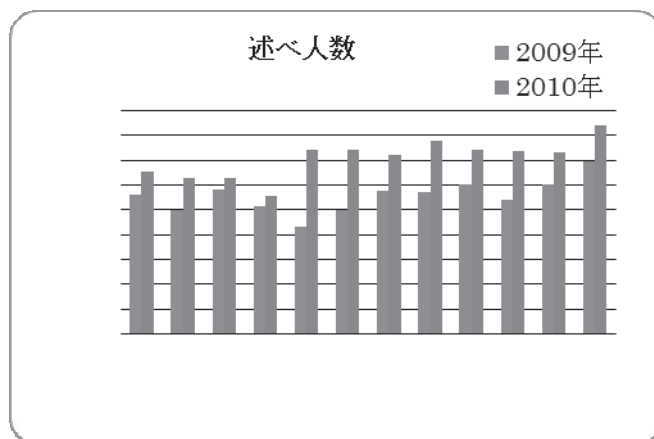
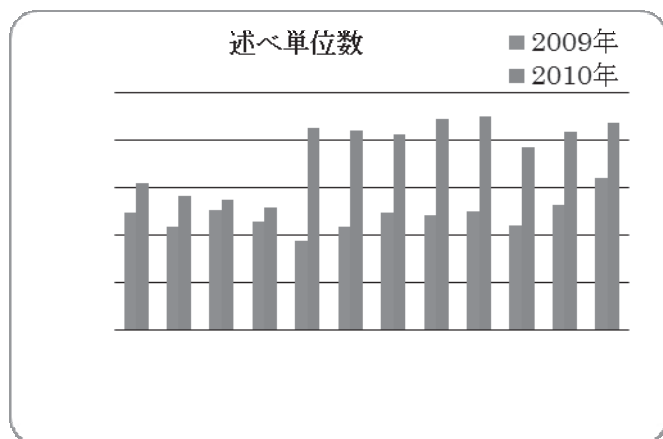
廃用症候群の約70%近くが循環器関連、その他、癌疾患が約15%を占める。依頼内容は、廃用症候群では早期離床が多い。



2. 業務量

①実施単位数と延べ人数

実施単位数は22,575単位(昨年度14,473単位)と昨年度より約1.5倍近く増加している。これは、8月以降 PT3名増加したためだと考えられる。また、延べ人数も16,980人(昨年度13,380人)と約1.3倍近く増加している。新患依頼数が前年度とあまり変動しないことより、入院期間が延長していることが考えられる。



②稼働率

当院におけるPT1名・1日当りの実施単位数は、19.9単位(診療報酬上の1日の平均実施単位数は18単位と規定)であり、平均以上の単位実施が維持できている。

PT1名・1日あたりの平均実施人数は、15.2名であり、1患者あたりの実施単位は約1.3単位であり、規定の9単位までにはまだ余地がある状態である。

3. 今後の取り組み

①脳血管リハの算定 I

②1患者あたりの訓練時間の延長 (平均1.3単位⇒2~3単位)

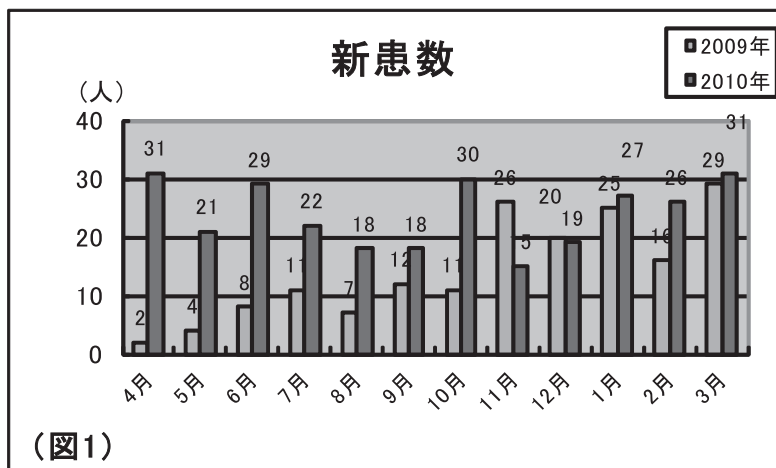
③心臓血管 I の取得について

[作業療法]

1. 患者構成

2010年度における作業療法新患数(図1)は、287名(男性168名、女性119名)で、平均年齢は68.0歳である。2009年度は、作業療法部門開設1年目であり、新患数は171名と少なかったが、2010年度は前年と比べ116名、新患が増加した。

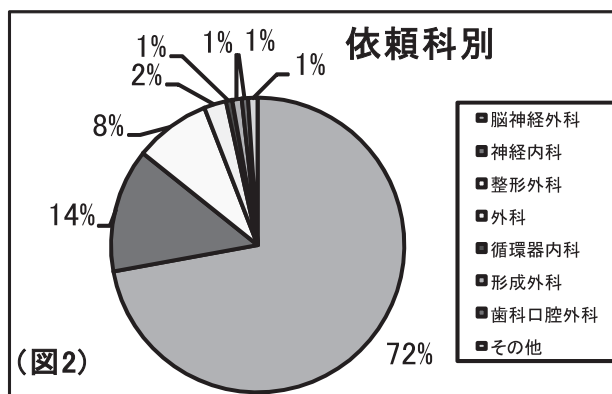
依頼科別では、図2のとおりで脳神経外科・神経内科で86%を占め、整形外科で8%を占めている。2009年度は、神経内科が4%であったが、2010年度は14%を占めており、やや増加傾向にある。脳神経外科・整形外科・その他の割合は大きな変化はない。また、新たに形成外科・心臓血管外科・歯科口腔外科・消化器内科から依頼があった。



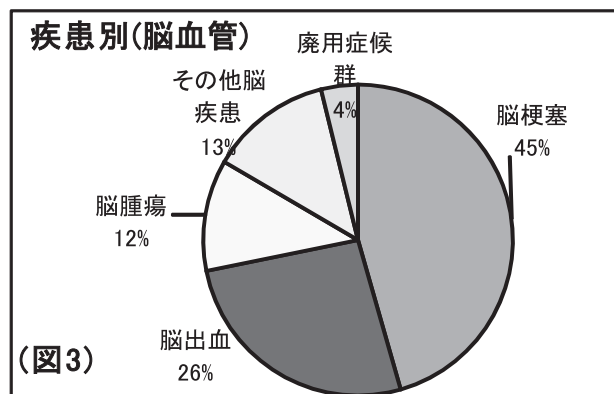
(図1)

疾患別の脳血管(図3)においては、各項目の割合は2009年度と比較して大きな変化はない、脳梗塞の割合が2009年度同様約50%を占めている。また、その他脳疾患には、硬膜下血腫、パーキンソン病、水頭症、てんかんがあり、新たに脳挫傷、一過性脳虚血発作、ギランバレー症候群での依頼があった。

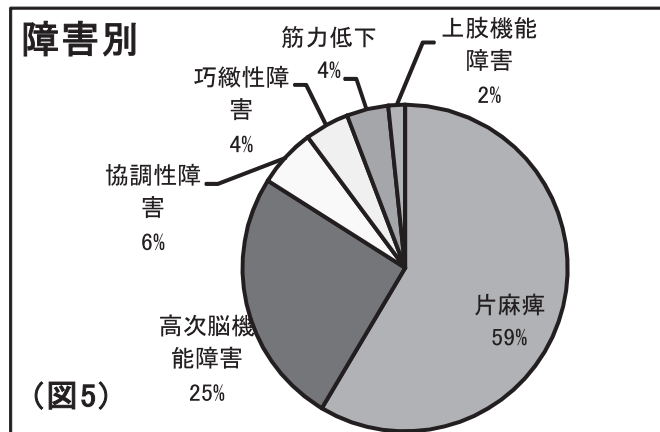
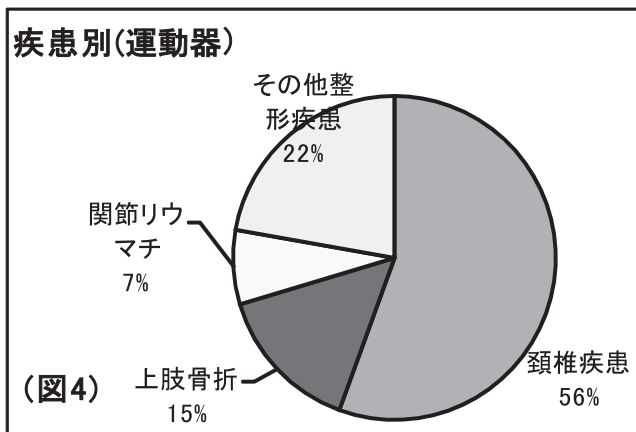
運動器(図4)においても、各項目の割合は2009年度と大きな変化はなかったが、その他整形疾患で新たに左手指壊疽、大腿骨骨折での依頼があった。障害別(図5)においては、各項目の割合は、2009年度と大きな変化はなかった。



(図2)

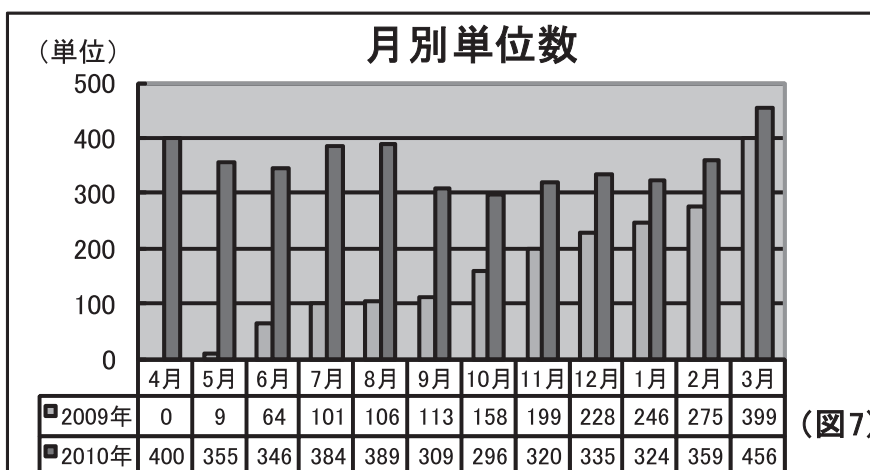
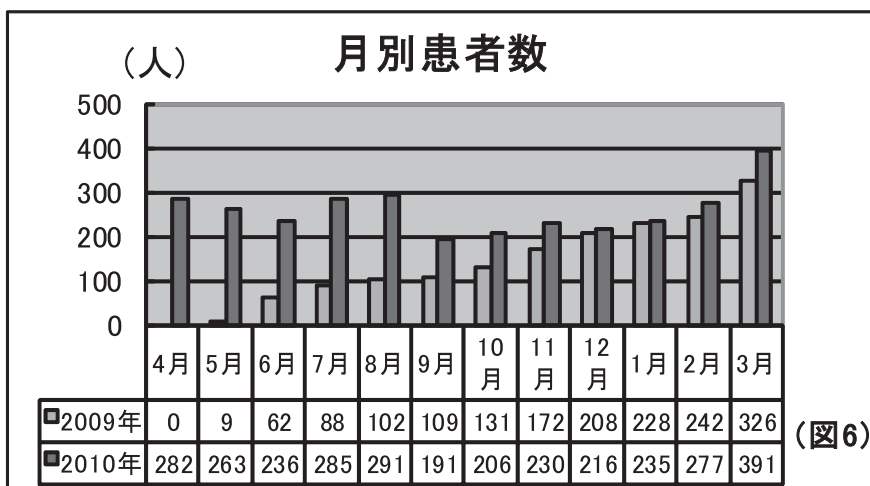


(図3)



2. 業務量

月別患者数(図6)においては、全ての月で前年の患者数を上回っている。月別単位数(図7)においても、全ての月で前年の単位数を上回っている。総単位数は前年度の1898単位に対して、2010年度は4273単位で2375単位増加することができた。2010年度の1日平均単位数は18.4単位であり、診療報酬上の1日標準単位数の18単位をキープできた。



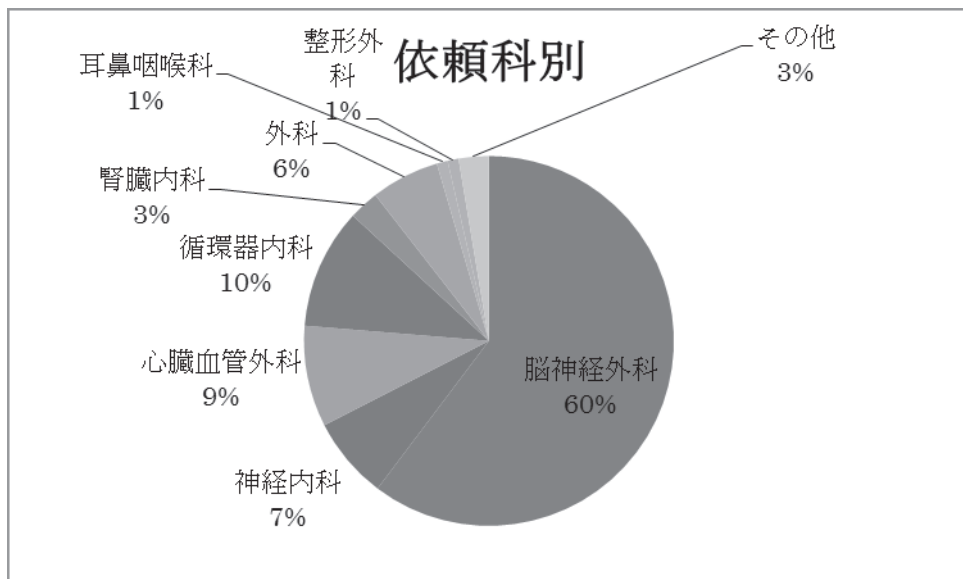
3. 今後の展望

2011年4月からOT2名増員となり3名体制となった。2010年度はOTが1名であったため、患者様1人当たりの平均実施単位数は1.4単位であった。人員増加に伴い、今後は、患者様1人当たりの実施単位を増やし、食事や整容・更衣・排泄・入浴など日常生活動作のアプローチに時間をかけることで1日の標準実施単位数の18単位を達成し、リハビリの充実を図れるように取り組んでいきたいと考える。

〔言語聴覚療法〕

1. 患者構成について

2010年度における言語療法新患数は418名(平均年齢69.3歳、男性250名、女性168名)である。前年度(286名、男性158名女性128名、平均年齢71.5歳)と比較すると、100名以上の増加(46%増)となっている。男女比は10年度のほうが男性の割合がやや高くなっている。平均年齢には大きな変化はない。



依頼科別の割合は図1のとおりで、脳外科・神経内科で67%を占めている。前年度に比べ10%多くなっている。絶対数も90名ほど増加しており言語療法の増加分のほとんどを占めているといっている。一方循環器、心臓外科で19%となり前年度に比する割合は低くなっているが、全体の母数が大きく変わっているため絶対数としては変化していない。外科や腎臓内科やその他の科からの依頼数には変化がない。

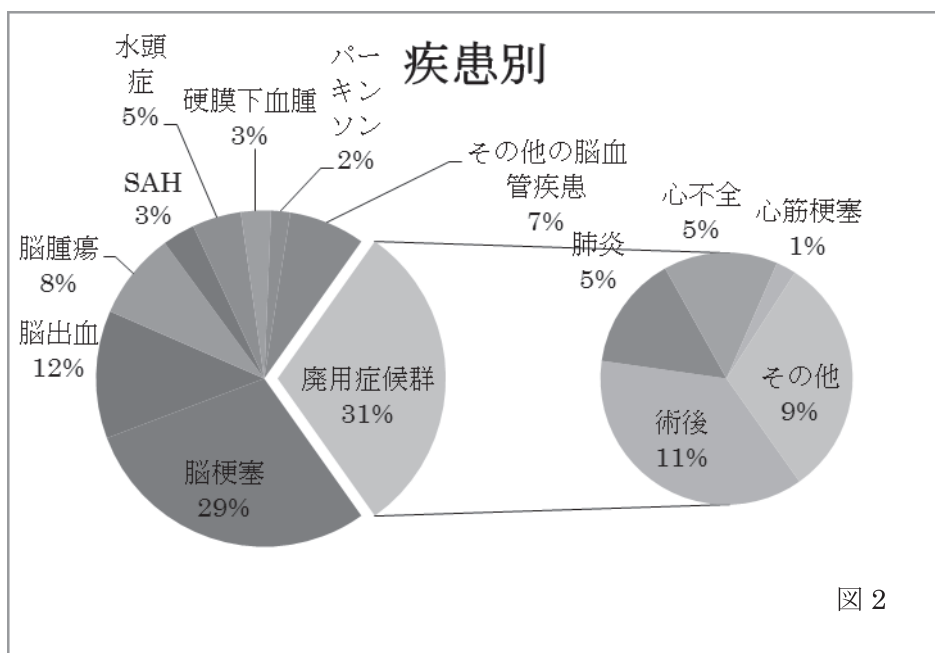
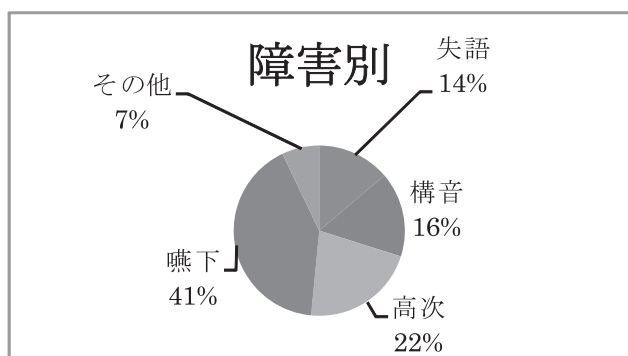


図2

疾患別ではコスト算定の関係上、大きく分けて脳血管疾患と廃用症候群に分けることができる。依頼科別の割合と疾患別の割合はSTの場合ほぼ並行しており、脳血管疾患は脳外科と神経内科からの依頼、廃用症候群はその他の診療科での依頼と考えてよい。廃用症候群とは外科手術または肺炎などの治療時の安静による一定程度以上の基本動作能力、応用動作能力、言語聴覚能力の低下及び日常生活能力の低下とあり、原因疾患はさまざまである。



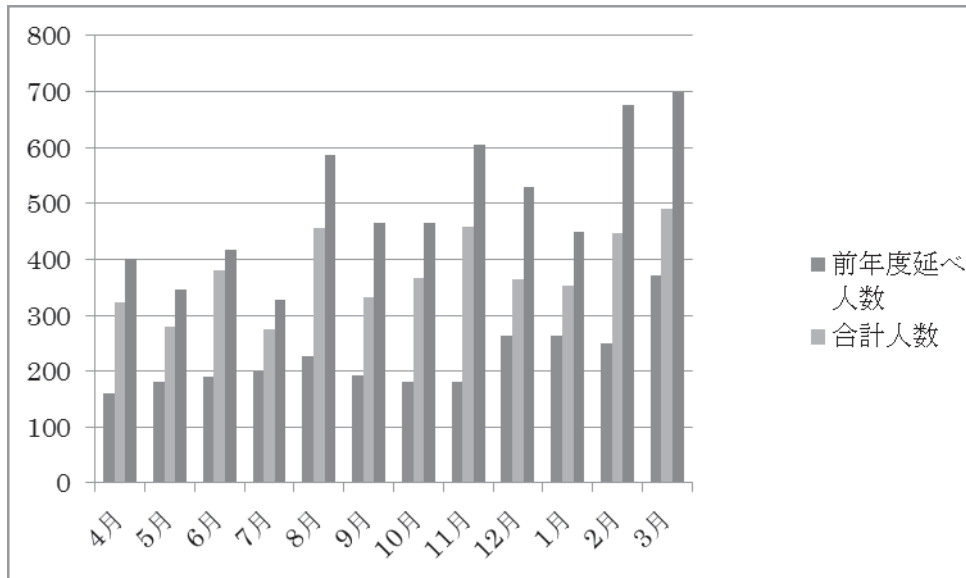
依頼内容については図3のように嚥下障害が4割を占めている。脳外科・神経内科からの依頼はコミュニケーション障害や高次脳機能障害が70%以上を占めるが、他科では約95%が嚥下障害への介入依頼である。脳外科・神経内科ではその疾患の特徴としてSTはコミュニケーションや高次脳機能障害にかかわるのは当然である。

2. 業務量について

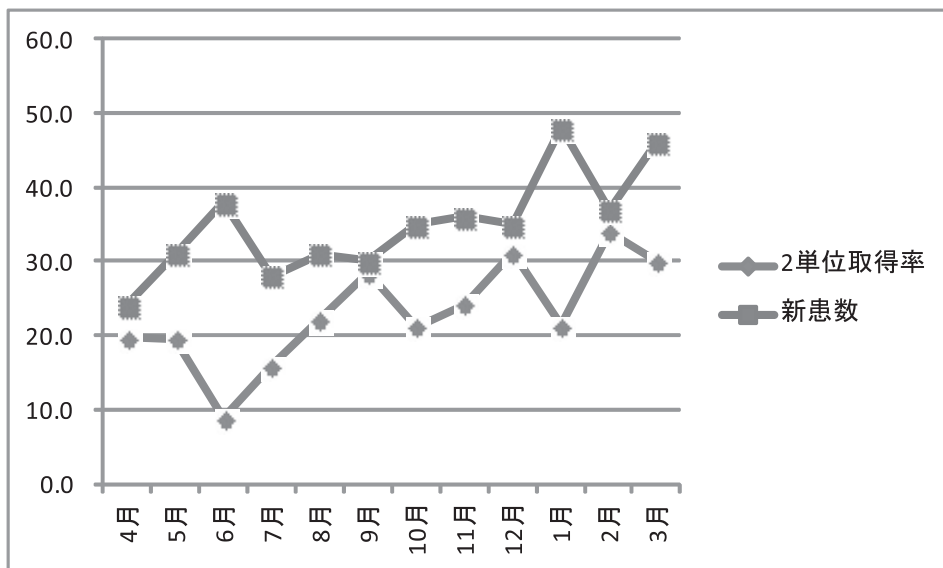
業務量 10年4月～11年3月

表 1

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
延べ患者数	323	279	381	275	456	333	367	459	364	353	446	490	4,526
前年度同月	160	180	190	200	226	192	180	181	263	264	250	372	2,658
今年度単位数	402	347	418	327	586	465	466	605	529	449	676	700	5,970



業務量は2009年12月末までまだコストが取れなかったため延べ患者数で示す。どの月も増加しており、2人体制になった7月以降大幅に増えている。単位数の比較ができないが、今年度に限って推移をみると、新患数は今年に入って30台後半から40台と増加している。2単位取得率も上がっており単位数の増加につながっている。



3. 今年度の課題

- 前回の運営委員会の際に
- ①病院へ ST の役割を啓蒙し依頼数を増やす
 - ②NST などチームへの参加
 - ③検査のコスト請求へ向けての整備
 - ④摂食機能療法へのサポート
 - ⑤VF(嚥下造影)の実施
- 以上の5項目を挙げている。①②は引き続き継続する。③の検査については2月から実施しており次回の報告で実績に

ついて報告したい。④についても見直しを進めている。⑤についても10年度は約10件行うことができた。今年度は実績を作っていきたい。